



2018年7月号
第377号
bestopia.jp

パリ通信
第79号

晩晴塾での学び

(1)晩晴とは

「人生本来晩晴を重んず」という言葉からきており「人生は最後の最後が肝心だ、最後の最後を晴れやかな心境で送れることができるならばそれが最高の人生だ」という意味です。心晴れやかな高齢期、それぞれの人生の晩年を晴れやかにする学習塾です

(2)主宰者は

藤井義正氏、神戸駅前の神戸クリスタルタワー6階ひょうごボランティアプラザセミナー室で毎月1回開催されています。7月は第43回でした。6ヶ月間充電の為休講された後の第1回目に私は参加させて頂いた。驚くほどの知識と豊かな感性を持たれておられいつも感服しています。参加費は1000円、準備される史料は幅広く奥が深く五臓六腑に落ちる言葉が満ち溢れています。藤井義正氏の略歴を著書「心豊かな高齢期のために」（ミネルヴァ書房）から引用させて頂いて記します。

1935年生まれ、1961年東京教育大学文学部独語学独文学専攻卒業、民間会社、財団法人、私立高等学校教諭を経て1969年よりラジオ関西人間学研究会にて「ラジオによる人間学講座」の番組作成に従事、1977年よりかねてより企画し兵庫県に検討依頼していた「兵庫県高齢者放送大学」が認可され、その番組の制作にあたり、1992年に学長に就任、1997年兵庫県阪神シニアカレッジ副学長に就任、2000年兵庫県高齢者総合相談センター相談員、認知症の研究をする。神戸垂水区で「心の詩」講座を開く、2014年晩晴塾を開く「老いの人間学」を専門とされていますが、もう一つ異色のベートーヴェン研究家で「私の“第九”：シラーの詩「歓喜に寄す」からベートーヴェンの「歓喜の歌」へ」（神戸新聞総合出版センター刊）を上梓され第九の真実を究められ訴えられています。シラーの詩“歓喜に寄す”の原詩を精読した著者が、厳しい人生危機に苦しんでいる人に、老いの先行きに不安を持つ人に、現代を人間らしく生きたいと願う人に贈る“第九”の豊かなメッセージ。

(3)藤井義正氏との邂逅的出会い

その契機はベートーヴェンの交響曲第9番第4楽章の合唱の日本語訳への違和感が共通していました。藤井義正氏には既に「私の＜第九＞」（2008年8月1日の発行）で第4楽章のシラーの詩を徹底的に調べ研究された成果の結実した内容でした。

「Seid umschlungen, (抱かれてあれ) Diesen kuss der ganzen Welt (全世界からの、この口づけを受けてあれ) いずれも受動態であるのが巷では能動態で「抱きあおう、世界の友よ、受けよこの口づけを」となっています。

歌詞はシラーの詩からベートーヴェンが構成的に引用していますからシラーの考えとベートーヴェンが選択した意図の研究になるわけです。日本では藤井訳は超がつく少数派です。然し、藤井さんの信念は堅くSeid umschlungen, (抱かれてあれ) が晩晴塾のバックボーンです。「大いなるものに抱かれて在る」晩年を伝道されているのです。私も同じ思いで末席を頂いております。

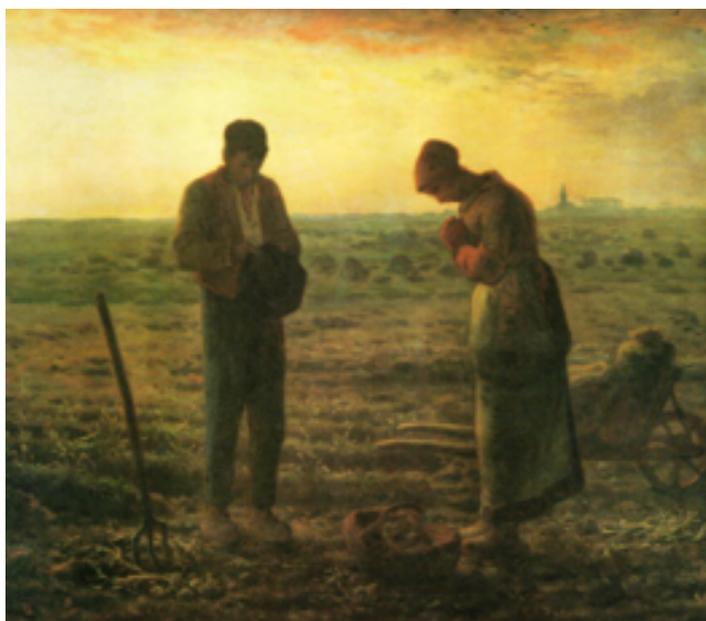
(4)晩晴塾の窓

毎回工夫された資料の一部を紹介します。平成27年4月第12回「生きがいの人間学」の裏表紙です

いのちの歌 作詩 Miyabi

生きてゆくことの意味問いかけるそのたびに
胸をよぎる 愛しい人々のあたたかさ
この星の片隅でめぐり会えた奇跡は
どんな宝石よりもたいせつな宝物
泣きたい日もある絶望に嘆く日も
そんな時そばにいて寄り添うあなたの影
二人で歌えば懐かしくよみがえる
ふるさとの夕焼けの優しいあのぬくもり
本当にだいじなものは隠れて見えない
ささやかすぎる日々の中にかげがえない喜び
がある

いつかは誰でもこの星にさよならを
する時が来るけれど命は継がれてゆく
生まれてきたこと育ててもらえたこと
出会ったこと笑ったこと
そのすべてにありがとう
この命にありがとう



このように絵が入り、
音楽も聴かせてくださいます。
五感に訴える工夫、段取りは愛情に満ちています。

藤井義正さんの「老いの人間学」はアンチエイジングを排斥されている。又社会的認知を求めない。「老年的超越」を目指しておられが既に25年前にその方向性をシルバールネッサンスという言葉で示されています。

(5)シルバールネッサンス

シルバールネッサンスは1993年「放送大学テキスト4月号」に掲載された藤井義正さんの詩です。

いま心に昇る 第二の太陽
シルバールネッサンス
高齢期に始まる
いきいきとした 心のよろこび
ここを掘れ ここを掘れ
ここに自信と希望がわく
ここにいのちの花が咲く
ここに明日を照らす道がある
あなたのいのち みずみずしい力を
よみがえらせるもの
それは 学び
学びがひらくのは
第二の青春

定年退職後初めての年賀状
私自身のシルバールネッサンス
藤井義正
太陽の温もりを ゆったりと
全身に浴びながら
こののどかさを
今の世の 潤いを失った
人の心の中に
送り届けたいと
思った
空は 今日も
小春日和

(6)ペルソナとペルソン

今月の配布資料の中に私が今まさに問題にしている「自己とは何か」にぴたりの図表を頂きました。

ペルソナ

仮面 ギリシャ悲劇の役者がつける仮面
社会的役割の象徴、表面的自己、仮の自己
世間から立派と思われたくて自己顕示と自己
防衛を繰り返し真の自己を見失うおそれあり。

ペルソン

いのちの本源につながる真の自己、但しそのことを本当に知っている人は少ない。

「己こそ己のよるべ」の自己。

「赤肉団上、一無位の真人」の自己。いま生きて命としての自己。宇宙につながる自己。

右の図に藤井さんが加筆された説明です。
赤肉団上（しゃくにくだんじょう）を調べました。



(7)もう一人の私がいる 赤肉團上有一無位真人。

常從汝等諸人面門出入。未證據者看看。

—赤肉團上に一無位の真人あり、常に汝ら諸人の面門より出入す—（『臨濟録』上堂）
臨濟禪師が弟子たちに向かって、「われわれのこの身体の中に、一人の形の限定できない真実の“人(にん)がいる。“彼、は、朝から晩まで五官を通して出たり入ったりしている。そいつをまだ見たことがない者は、見よ、見よ」と言われた。これこそ禪者が求めるべき、「真実の自己」なのだ。

西田幾多郎という哲学者の代表的論著『善の研究』の序文に、「個人あって経験あるにあらず、経験あって個人あるのである」という難しい一文が見える。われわれは誰でも、「自分」が花を見たり、月を眺めたり、鳥の声を聞いたり、あるいは雪を冷たいと感じたりしていると思っている。しかし西田はそうではない、と言うのである。

西田に言わせれば、「個人」が花を見たり月を眺めたりするのではない。むしろ逆で、花や月を見て美しいなあと経験することによって自己が形成されるのだと言う。今朝は寒くて外へ出るのは嫌だなあと思ったとき、寒いと感じる個人（自分）ができ上がる。そのように、自分という個人は、一瞬、一瞬、違った内容の個人として生き続けている。決して個人というような確固不動な実体はない。個人は「存在」ではなくて「生成」、つまりいつも進行形なのである。

頬を抓ってみると、確かに他人ではない個体としての「自分」がある。しかしこれはもともと母の胎内から生まれ出たもので、やがて死ぬと棺桶に入れられる「肉の固まり」に過ぎない。しかし「私は」という自我意識が、その事実を見失わせる。

木や石と違って人間には「意識」があり、その意識が他人ではない「自分」を自覚させている。こうしてわれわれは自我意識を「自分」だと勘違いしている。

意識は鳥の声とか、花の色というような外界のものが、感覚器官に入ってくる瞬間に起こるものであるから、もし何にも入ってこなかったら自我の自覚もないであろう。こうして「自己」というものの内容は、肉の固まりと感覚器官を通して入ってくる経験によって成り立っているのである。

道元禪師はこのことを「本来の面目」（真実の自己）と題した歌で、「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて冷しかりけり」と歌っているのである。

（臨濟宗黄檗宗公式サイト・臨黄ネット www.rinnou.net）

(8)質問はパリへ

大変難しくなってきましたのでパリの古賀さんに尋ねました。ウキペディアも国によって内容が違うことが分かりました。フランス語を訳してくれました。

「ペルソナ」とはラテン語(動詞 personare, per-sonare : 何かを通して話す)に由来し、芝居の役者が着装する「仮面(マスク)」を意味していた。この仮面の役割は、芝居の登場人物の外観を表現できるだけでなく、観客に向けてかなり遠くまで「声」を聴かせることができた。

精神分析学の分野では、ユングがこの「ペルソナ」という言葉を、個人が社会と関係を結ぶ「人格」形成に用いた。人は、多かれ少なかれ、社会で決められた役割りの型にはまら

なければならない。「自我」は、簡単にこの「ペルソナ」に同化することができる。他者の目に映る個人として行動し、自分が本当は一体誰なのかがわからなくてもよいからである。この意味では、ユングの「ペルソナ」は、ウニコットの「偽りの自我」に近い。つまり、「ペルソナ」とは、「自我」が創り出す「社会的な仮面」、イメージであり、個々人の本当のアイデンティティを奪ってしまいますことになりかねないことを理解しておかねばならない。

Le mot **persona** vient du latin (du verbe personare, per-sonare : *parler à travers*) où il désignait le masque que portaient les acteurs de théâtre. Ce masque avait pour fonction à la fois de donner à l'acteur l'apparence du personnage qu'il interprétait, mais aussi de permettre à sa voix de porter suffisamment loin pour être audible des spectateurs. Dans sa psychologie analytique, Carl Gustav Jung a repris ce mot pour désigner la part de la personnalité qui organise le rapport de l'individu à la société, la façon dont chacun doit plus ou moins se couler dans un personnage socialement prédéfini afin de tenir son rôle social. Le moi peut facilement s'identifier à la persona, conduisant l'individu à se prendre pour celui qu'il est aux yeux des autres et à ne plus savoir qui il est réellement. Dans ce cas, la **persona** de Jung est proche du concept de faux self de Donald W. Winnicott. Il faut donc comprendre la persona comme un « masque social », une image, créée par le moi, qui peut finir par usurper l'identité réelle de l'individu.

これに対して「ペルソン」(personne):フランス語です)もまた、「ペルソナ」と同じくラテン語に由来します。「人」という意味で広く一般的に用いられるフランス語ですが、哲学や精神分析学では、* 個人として捉えられる人間

* 自身を自覚している実体

* 実体、存在の権利を認識している個人

(*Philosophie*) Individu ou entité consciente d'elle-même et à laquelle on reconnaît des droits.

*

日本語版にはない説明です。凄いいことになってきました。

(9)「内なる人」と「外なる人」

追い打ちをかけるように藤井さんから聖書の「外なる人」と「内なる人」について追記が送られてきました。

すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。

わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。(コリント人への手紙2の4章15-17)

私は今TA交流分析の本を書いており自我状態をどのように説明すべきか迷いに迷っているところです。要は理解出来ていないのです。10冊本を読んでも私が他者に説明できる文章に出会いません。これは私の哲学的抽象理解能力に弱点があるからなのです。苦闘しますと光が見えて来ることを願いながら次に進んでいます。

(10)自己実現とは

TAの目的を分かり易く示している文章があります。TAの恩師岡野嘉宏先生の言葉です。どの本より分かり易く私も好んで用いています。

「自分自身が本来持っている能力に気づき、その能力の発揮を妨げているいろいろな要因を取り除いて、本当の自分の能力の可能性を実現して生きること」これを自己実現して生きると言います。

20年余りこの文章に疑問を持つことはありませんでしたが、今回ひっかりました。

最初の文章です。本来持っている能力（自己？）に気づけば苦勞しないのです。自我に苦しみ試練を受けるなかで何が苦しみの原因かを探しそれをそぎ落とし、はぎ取っていくことによって見えて来るのが本来持っている能力なのです。それがTA理論です。原因を探る手段として4つの分析方法と統合によって自律的に生きる道を示しているのがTA理論だと分かりました。

だからと言ってこの名文を書き直すことはできません。やっぱり優れた文です。

日本にTAを紹介して実践された池見酉次郎先生は当初から日本的TAを主張されセルフS概念を導入されましたがその発展は今のところないことを私は残念に感じています。私も同じ発想を感性論哲学から試みています。

(11)まとめ

藤井さんの図表と指摘は凄いと感銘しました。

ペルソナとペルソンを一目で分かるようにして下さっています。ペルソナからペルソンへの転換が自己実現だと断言できるようになりたいです。

執筆には情熱をもって取り組んでいますが、役不足は争えませんが、この分野は医師、教授、学者の世界です。それを熟知しつつも挑戦する自由があることを感謝しています。喜寿の記念に「わたしの幸せあなたの幸せ」第4版を完成します。